

第1章 ウイグル民族アイデンティティと民考漢の将来

民族的アイデンティティとは

私が民考漢のことを知ったのは、1997年である。「教育というのはウイグル・アイデンティティの中心である、とウイグル知識人は信じている。だが、それがディレンマにもなっている。ウイグルの子供たちは、ウイグル語か漢語か、どちらかで学習するかを選択することになる。漢語を選択すれば中国社会にスムーズに入っていける、ウイグル語を選べば、ウイグル文化を維持できるが、職業などで社会的地位を獲得することが難しくなる。民考漢はウイグル語を話すことが得意ではなく、家でも漢語で話す。ウイグル人は彼らを『14番目の民族』（新疆ウイグル自治区は公式には13の民族が存在するとされていた）と呼び、ウイグル人とは違うと考えていた。このハイブリッドな民族は自分自身を中国人でもウイグル人でもない、双方から疎外されていると感じている。」(1)



(1996年、カシュガルの農村)

上記に引用したルードルソンは民考漢と民考民を対立的に考えている。民考民は時間にルーズであるとか、本を知らないとされ、それに対して、民考漢はウイグルの古典を読んでいない、と言いつけている。民考漢の生徒はウイグル語も漢語も良く知ら

ない。ウイグル人の多くは民考漢を見下す。漢人もかれらを真のウイグル人と見なさない。このように、著者はかなり民考漢に批判的である。彼は人生で最も重要なことは「私は誰であるか」を知ることであると言う。西欧人に多いアイデンティティの問題である。アイデンティティは人生の中で一貫して、不変であり、純粹であるというのが、西欧人の一般的な考えなのである。



(教師節の祭日、アトラス模様の民族的な衣裳で舞踊の稽古に励む)

エリクソン自身の表現によれば「この同一性という言葉は、自己自身の中の永続的な同一（自己同一、*selfsameness*）という意味と、ある種の本質的な性格を他者と永続的に共有するという意味の双方を暗示する」。本質的な特徴は、エリクソン自身にとっては、「人種」、宗教から民族、歴史を経て「価値観」、文化的同一性までを矛盾なく包含する。

エリクソンのアイデンティティの概念は広いが、師と仰いだフロイトは違った。それは「言葉でとらえることが少なければ少ないほどそれだけ強力な、多くの曖昧な感情的諸力、ならびに内面的同一性の明白な意識、同じ精神構造の秘密である」。そしてこのユダヤ人としての内的同一性 (*inner identity*) は、人種や宗教にではなく、彼の属するユダヤ民族のその特異な歴史によって培われた固有の歴史観と一人の個人（フロイト）とのきずなを意味している。(2)



つまりアイデンティティという言葉は反ユダヤ主義という歴史的背景を抜きにしては語れないのである。エリクソン自身もユダヤ人の母親に育てられ、父親ははっきりとしない。そのような背景から、アイデンティティの概念を考えたのであろうが、米国に渡る過程で上に述べたように、概念は拡大していった。だが、フロイトにしても、エリクソンでも歴史的な偏見や差別とは無縁ではない。そうであれば、民考漢を考えるには、ウイグル人と支配民族である漢人との民族的な歴史関係を考えざるを得ない。

二つの歴史的時期の民考漢⁽³⁾

新疆は戦後、二つの時期に民考漢が現れている。第一の時期は、プロレタリア文化大革命のウイグル(そして、すべての少数民族)文化の抑圧である。60年代の半ばから、70年代の半ばにかけて、わずかなウイグル学校しか開かれていなかった、そして、都市部のほとんどの子供がやむを得ず漢学校に通った。そして、彼らは中国語で教育された。同時に、ウイグル語に関しては、伝統的に使用されたアラビア文字は、新しいスクリプト(*yengi yeziq*)に取って代わられた。



(ウイグルの学校にはこのような規則、標語が掲げられてある)

戦後に始まったウイグルの文字改革は、外圧の影響もあって、混乱の連続であった。最初はソビエトの影響の下に、キリル文字の採用を決めていたが、半ばで中ソ対立の政治情勢の急変によって中止された。1958年にはピンインが基本となったアルファベット文字が導入された。その後、文化大革命によって、広まり始め、1974年には大規模にその使用がスタートした。この時期にこの文字によって教育を受けたウイグル人は、「失われた世代」になることになる。1982年に再度アラビア文字が復活したからである。

第一の時期の民考漢の経験は統合失調症的である。かれらが同化しようとした中国社会は、そのように努力しても「見せかけ」と感じ、所属感は得られなかった。

第二の時期は自由市場経済の時期である。機会均等がほとんど存在しない多民族社会で、彼らの子どもの生活の可能性(高等教育、雇用、経済の安定、社会的な地位)を高めるために都市の両親は意識的な決断をした。この時期から、民考漢が急激に増え始める。

学齢に達すると、彼らは漢語学校に通う。そこでは、中国語がかれらの第一言語として徐々にウイグル語に取って代わる。かれらはウイグル文化とは対照的な中国人の概念の *wenhua* (文化) (教育への態度、社会とジェンダー関係、宗教など) にさらされる。言語の移行は異なった方法で個人に影響する。ある人は一時的であるかもしれ

ない、少数民族の文化を知らないことに恥じる人もいる。他のひとは、より上向きのアイデンティティを持ち、自分たちが「現代的で、進歩的である」と考えて、「国際的」と感じる。

両義的存在としての民考漢

スミスは、エリクセンの「民族的変則」ethnic anomalies、ビクター・ターナーの「どっちつかず」(betwixt and between)、二転子(混血児の中国語)、メアリ・ダグラスの「異常とあいまいさ」の概念、などの分析道具を使っている。

問題は民考漢が集団的カテゴリーとして認識され、それがウイグル人からも漢人からも排除されているかということである。それを以下で検証してみよう。

「半数近くの者が学校生活のみならず、社会に出てからも民考漢であるがゆえの差別を受けたと感じている。とりわけ四割近くの者は、自民族からそうした差別を受けたと感じている。特に25歳以下の若い年代のなかには、自分たちを新疆社会のなかで『孤独に戦う軍隊のようなもの』と評する者も少なからずおり、その表現には民考漢という集団的なアイデンティティとそこへの帰属意識の形成が萌芽的に表われているように思われる。」(4)



この論文の調査結果には、「民考漢は少数民族の中の重要な人材である」との回答

が 46.8%もある。ウイグル民族といえども同質的でフラットな集団ではありえない。地域差、歴史的背景の差、職業的な差もあり、そのなかで考慮すべきは階層差であろう。民考漢はいわば「エリート」、「知識人」の子弟が多い。漢語学校に通うにはそれなりの経済的資力と教育程度が必要である。「重要な人材」とはこれを正しく認識していることであろう。「ウイグル族でもないし、漢族でもない『14番目の民族』である」との排他的で、偏見的な回答は 9.4%しかない。

「一般に当該集団への帰属意識やそれに基づく自己規定は、他の集団による他者化のまなざしとそれに対する当該集団の自覚、そして我々意識の醸成という一連のプロセスにおいて形成される。民考漢の集団的アイデンティティの形成も同様の過程をたどると考えられる。ただ、少なくとも現段階では、民考漢のそれが自他ともに認める明確な集団意識として具体的に把握されるまでには至っていない。」(5)

それよりも支配的な民族集団である漢人からの反応が重要であろう。

「さらに、漢人の間には民考漢と他のウイグル人（民考民）を差異化して捉える態度もうかがえる。一般に漢人は民考漢を他のウイグル人より肯定的に評価する傾向がある。また民考漢と「民考民」に対する漢人のいさぐさ親密感（どちらと気が合うか）を比較すると、明らかに前者の方を好意的に捉えていることが分かる。このことは漢人が民考漢を一般のウイグル人とは異なる特別な人々あるいはカテゴリーとして捉えていることを示すものである。漢人は民考漢に対し親近感を持つとともに、友好的で肯定的な評価をしていた。しかし、いかに親近感を持つとはいえ漢人にとって民考漢があくまでも異民族に属することには違いない。そこには長年にわたる歴史的、政治的関係やイスラームを基軸とする生活様式の違いが明確に横たわっており、それは地域の身近な隣人でありながらも相互の婚姻がほとんど進んでいないことから明らかである。民考漢に対しては依然、民族的他者としての位置づけが維持されているのだ。漢人にとって民考漢は言語や生活圏を共有することで一般のウイグル人より親密な関係を構築しているものの、相互の境界は基本的に維持されている。」(6)



(ホータン師範学校)

民考漢のライフヒストリー

次に紹介するのはこの論文の重要な部分で、一人の民考漢の長いインタビュー記録である。(7) これを見ても、彼女は知識人の家族に生まれ育ち、大学までいくほど教育程度は高い。このような知識人の階層は、ウイグル社会の近代化に関心があり、ウイグルの伝統的な文化や、イスラームについては距離を置いている。ほとんど、ウルムチなどの都会に出てきて、都会的な生活様式を身につけている。

彼女の夫は民考漢であるが、彼らの十代の娘は民考民である。両親は南新疆の出身、彼女と彼女の兄弟はウルムチで成長した。母親はプロレタリア文化大革命のために運動して、母国語を子供たちに教えることができないうらい忙しかった。子どもたちは一日中、幼稚園にいることもあった。

彼女は大学卒業後、ウイグル語を学んだ。ウイグル語新聞を読み、ウイグル語テレビを見ることによって、会話能力を向上させた。だが彼女のウイグル会話能力のレベ

ルはネイティブより低い。彼女は漢字でメモを取る、そして、彼女のウイグル語辞書は新しいスクリプトである。民考漢の夫や友人とは中国語で頻繁に話す、もしくは中国語とウイグル語の混合で話す。

彼女の近い友達は民考民ではなく、民考漢である。彼女は、オルトラシュ(歌による懇親会、ダンス、および冗談)に出席しても、ウイグルの歌などは楽しめなかった。子供のときに、彼女は、ふるさとで伝統的なウイグル舞踊を学んでいない。

それに対して、彼女の娘には、若い頃からウイグル舞踊を学ぶよう奨励して、伝統的文化を賛美した。定期的に祖母の住居に行って、ウイグル文化を学んだ。祖母の住居は通常の中央アジア人が持つカーペット、かぎ針編やレースなどウイグル文化的装飾で作られた環境であった。

彼女はイスラーム教の実践、特にジェンダー関係に関して客観的な距離を維持した。他の民考漢友人のように、彼女は時々イスラーム教の社会規範によって女性に加えられた圧力に関して不平を言う。それにもかかわらず、信仰心の感覚を維持した。



(モスクの近くには必ずコーラン、イスラーム関係書を売っている人がいる。イスラームは文字を読める人を増やした功績はある。)

ウイグル人は、現代のウルムチの人々が閉鎖的になって、彼らの隣人と付き合わない傾向を好ましくないと考える。都市化が原因でもあるのだが、むしろ、これを漢人の悪い社会的な習慣への同化のせいにしてしている。当然ながら、民考漢に特にこの告発が向けられる。

多くの第一世代民考漢は、漢人への否定的な社会文化的イメージを部分的に内面化している。彼女は漢語学校で相反する感情を持った。一方では、「高度な漢人」と、「進歩の遅い」少数民族状態は彼女に恥の感覚をもたらした。特に少数民族の文化が迫害されたこのプロレタリア文化大革命の期間はその感覚が強かった。他方では、彼女のアカデミックな進歩に関する彼女の教師の称賛は、ウイグルであることの自尊心もたらした。「中学校にいるとき、私は、ウイグル人であることに恥ずかしさを感じた。今、私はそのような恥は感じない。」

「私は店の開業のときに、宣伝のためにスナイ（木管楽器道具）とナグラ（一種のドラム）を演奏している、雇われたウイグル人を見る。そして、それに当惑を感じる。私たちのリーダーは惨めである。彼らはなぜはっきりと話さないのか。彼らは政治家である。しかし、彼らは皆イエスマンであり、妥協者である。」

このように民考漢はウイグル社会の状況に憂える知識人特有の鋭敏な感覚を持っている人たちである。ウイグル民族の不平等な状態、また、民考漢として見られていることも認識している。このよう民考漢は他のウイグル人と違うことは確かであろうが、それは若者世代が他の人と違うくらいの差異でしかない。民考漢が自民族から差別や偏見の対象になることは考えにくい。最近の若者は礼儀を知らないというくらいの感覚ではないのか。



民考漢はカテゴリーか

論文の著者はいう。「最も重要であるのは、民考漢が結局、漢気質(*Khanzu mijaz*)を取得するからである。」(例えば、漢人は物事を直接的に言う、それはウイグル人にとって礼儀を欠くことである。ウイグル人は間接的に、遠まわしに言う)これがウイグル人にとって民考漢が嫌われる理由である。当然であろうがかなりあいまいな理由である。その結果、著者はM. ダグラスの図式を借りて、次のような民考漢への対処法がありうると言う。(8)

- ①、ウイグルと漢の両方が、まるで民考漢が完全にウイグル人(その結果、中央アジア人)か、完全に中国人であるかのように行動することによって、あいまいさを減少させようとするかもしれない。(民考漢は家でウイグル語を話すと主張するウイグルの両親; 民考漢の同僚について中国化の度合いを大きく扱う漢人)。
- ②、ウイグル人は具体的に、*anomaly*(同化を防ぐための手段としての漢学校の拒絶; 漢人との結婚のタブー)をコントロールしようとするかもしれない。
- ③、民考民 ウイグル人は、*anomaly* を避ける(民考漢よりむしろ他の民考民を助ける傾向)。
- ④、民考民 ウイグル人は異常を危険であると(漢人への協力性の告発)ラベルするかもしれない。



ますます多くの漢人が新疆にわたって、仕事の競争はさらに激化している。このような環境の変化のなかで、民考漢が二重もしくは複数の意識を発達させ、アイデンティティを状況により異なって、使用する能力を見だし始めるのを見るだろうか？ それらは、現代のウイグルを生き抜く人として現れることができるだろうか。または、この二元的な意識は耐え難い感情的で社会的な結果をもたらすだろうか。

しめくくりとして、著者は以上のような問いを発している。そして続けて、民考漢は、数が増えて、ゆっくりと異常ではなく正常になっていく。しかしながら、その変則的なグループは分岐して、それ自体が民族のカテゴリーであると宣言するかどうか、不明瞭なままで残っている。



(ウイグルの書店、ウイグル人も本が好きです)

だが、民考漢をカテゴリーになると考えるべきではない。民考漢はマジョリティの言語に包囲されているマイノリティの言語には、世界のどこにでも起こる過渡的現象である。カザフでも、内モンゴルでもそうであろう。なぜ、ウイグルだけ民考漢として、カテゴリーとして考えなければならないのか。この言葉が析出されてきた歴史を振り返る必要がある。スミスの論文もそうであるが、民族的アイデンティティを純粋なものとして考える傾向が強い。ウイグル人というカテゴリーも、漢人でも、純粋で

はない。二重もしくは複数の民族意識を持っている。民考漢が誕生した、もしくは誕生させられた時点でのみ相互対比的に民族集団として創られているだけのことである。

すべての共同体から追放されて、個人は、共同体の未来を評価するどんな歴史的なアイデンティティも持たない。現実的にはそのような存在はまれである。民考漢のような両義的な存在が、ウイグル人からも漢人からも排斥されることがあるのだろうか。ほとんどそれはありえない。民考漢はあくまでウイグル人である。800万のもウイグル人は単色ではない。地域差、世代の違いなどをはじめとしてさまざまな違いがある。民考漢が持つ差異が問題とされたのは、ウイグル語の運用能力が低い、ウイグルの音楽、舞踊を知らない、などである。しかし、それ以上に問題なのは漢語能力が高いということである。それによって漢人の社会に参入して社会的成功を収める。新疆においては社会的成功といえば漢人の社会においてのみ可能である。ウイグル人社会から離れることでもある。社会的成功に対する嫉妬もあるだろうし、ウイグル人社会から離れることの警告の意味もあったかもしれない。どちらにせよ、民考漢は一時的で過渡的な現象にすぎない。



(ホータンの漢人の小学校、毎日親は迎えに来ます)

民考漢がウイグル人社会からも漢人社会からも等距離の両義的存在などではありえない。この二つの社会には圧倒的な政治的経済的力関係の差が存在する。宗教をはじめとして文化が違う。ウイグル人は漢人社会に同等の立場で参加することはできない。民考漢はウイグル社会内部で生じた小さな内紛でしかない。少なくとも言語のレベルで生じた同化政策にマイノリティとして精一杯対応した結果である。教育の場における漢語の教育言語としての優位は進められている。新疆班という名称で、沿岸部の中高校に留学させて漢語教育によって英才教育を行うというのもその一環である。新疆班ともいわれるが、すでに先行的にチベット班もある。双方とも漢民族との民族対立が激しいところである。中国政府はこのように民族紛争の基盤となる社会的状況の解消を言語政策、言語統一に求めている。もっと明確に言えば教育言語の統一であろう。

民考漢の増加をめざして一内地新疆高中班一

「中国共産党の指導(者)を支持して、祖国を心から愛して、社会主義を心から愛して、祖国統一を守って、民族団結を堅持して」2000年に制定された「内地新疆高中班管理方法」の第一条にその目的として上記のようなことが書かれてある。

新疆班の目的は明確である。民族団結である。このような教育体制があるのはウイグル自治区とチベットだけである。双方とも民族対立が激しい。教育の力によってそれを平定しようと意図している。チベットが先行し、ウイグルが2000年から始まった。最近のチベット、ウイグルの騒乱を見るとこの教育の試みは成功していないように見える。



ただ、中国は教育に多大の価値をおき、「文化」の意味、文でもって人を変える、すなわち教育の力を信じている。短期的に教育の効果がでるとは期待していない。だから、民族対立が収まっていないという理由だけで、この教育は失敗だったとは即断しえない。

最近この新疆班についての研究書が出版された。それを紹介し、検討する中で、新疆班の教育体制について論じよう。著者は新疆班が所在する学校を調査している。民族統合のためのこの教育体制の現状の分析に社会資本（social capital）の概念を使っている。社会資本とは利益へのアクセスを容易にする過程として理解される。公式組織、ソーシャルネットワーク、共同の規範、および個々の行動などがその内容である。当然ながら本論では社会資本分析は民族性と関連づけられる。



新疆班は正式な学校組織の中の特別な少数民族の社会と考えることができる。また、ウイグルの生徒の社会的な資本増強の過程は、民族内の相互作用であるソーシャルネットワークが、より広い社会歴史的な文脈や、学校組織や、ウイグル民族文化や規範などのような多くの関連する概念、および有利な行動を統合することである。

この教育制度に希望者が殺到しているように、この制度を利用して、沿岸部の有名大学に進学する。それによって地位の上昇をはかる。だが、ソーシャルネットワークを拡大するのは、同じウイグル民族に限られる。民族統合、民族融合がこの教育制度の趣旨であるのに、学校の現場では事情が違う。この制度が始まったばかりで、民族問題という敏感な問題を抱えているためか、「安全第一、学習はその次」という安全運

転が至上命題である。とにかくトラブルだけは避けたいというのが学校関係者の願いだろう。「低めのアカデミックな期待や、民族な線に沿って隔離された階級や、原則など現実的な実践は、少数民族の有能者を訓練し、民族統合をめざすという目標と妥協している」(9)

漢人の生徒との交流は民族統合の考えからいえば望ましいのだが、学校の現場ではそれぞれ民族ごとに隔離された形で授業が行われ、食堂などで漢人と出会うだけである。校則が、現地の漢の生徒がウイグルの生徒に接触するのを避けようとしている。

ウイグル人はこの学校に入ると、自治区での教育の後進性を再認識する。設備、教師の質など素晴らしいと思う。しかし、中国の教育制度がカリキュラム管理など非常に中央集権的なので、新疆班などの国家規格カリキュラムはウイグル人にとっては文化的感受性を欠いている。



一年の基礎カリキュラム（数字は時間数）月曜日から土曜日の午後まで。

中国語(10)、数学(7)、英語(12)、物理学(3)、化学(1)、政治(1)、体育(2)、班会(1)、課

外活動(2)情報技術(1)。

3年にわたる中等学校カリキュラム（日本の高校に相当する）

あるクラスの例：中国語(6)、数学(6)、英語(6)、物理学(4)、歴史(4)、地理学(4)、化学(4)、政治(3)、情報(2)、芸術(1)、体育(2)、班会(1)。

別のクラスの例：中国語(7)、数学(7)、英語(7)、物理学(6)、生物学(5)、政治(2)、化学(2)、体育(2)、班会(1)、課外活動(2)、芸術(1)、独学(2)、など。(10)

この内容を検討して、カリキュラムが文化的感受性を欠いていることを著者は次のように説明している。(11)

3年の中等学校の教科書の分析をしてみると、コースの中では、中国語や、歴史や、イデオロギーや政治などの人文科学コースには価値観が多く含まれている。よって、学校の目的がそれによってわかる。新疆班の学校のすべての教科書が北京の人民教育出版社によって出版されている。中国語コースの教科書は141の項目から成る。外国文学に関する20の項目の中で、1つだけが、少数民族の書き手によって書かれている。ジャン・ボザン(1898—1968)による内モンゴル旅行記である。ジャン・ボザンはウイグル人歴史家であった。しかしながら、ジャンは湖南省の桃園生まれのウイグル人の子孫であった。内地中国であり、新疆から遠い。彼は、幼年期にウイグル人の教育よりむしろ古典的な中国の教育を受けた。



また、教科書は 55 の中国古典文学を含む。ウイグル人生徒には難しい。歴史の教科書はアヘン戦争から現代の中国(1840—1999)までを扱っている。国の結束のテーマは明確に強調されるが、それは中国の中央政府のもの、すなわち、ウイグル人などの少数民族よりむしろ社会の主流のものである

その歴史の教科書はウイグルについてはわずかである。1 つは、清王朝後半における 1870 年代の境界危機と中国-フランス戦争(教科書に述べられているように)である。それに続く短いパラグラフで、ウイグル人と新疆に関する北西の中国の境界危機を述べる。左宗棠は 1878 年のヤークブ・ベクの侵入(コーカンドの中央アジアイスラム教の政権)の後に南新疆でカシュガルを再占拠した。帝政ロシアに対して、北西の新疆でイリの返還達成のために外交行動を取った。(新疆イリは、1881 年にロシアに占領された)。



(ホータンの幼稚園)

それから、「新疆ウイグルの自治政権は 1955 年に設立された」。3 年間の教科書はそれぞれマルキシズム、毛沢東主義、および鄧小平のイデオロギーに基づき、経済学と社会主義の哲学と中国の現代の政治に関する一般知識を伝える。後者は「我が国は多民族国家である」、と、「我が国の宗教に関する大勢と政策」、と題する民族性と宗教についてである。

そのうえ、イデオロギーと政治コースの中国の民族性のセクションには、新疆の于

田県でウイグルの農民コルバン老に関する実話がある。彼は北京の毛沢東を訪問した
がっていた。彼の夢は 1950 年代後半に長い努力の末に実現した。これは、ウイグル
人の中央求心的な傾向と、彼らの現在の中国政府の賛美を反映する印象的な個人の逸
話である。(このコルバン老はホータンの近くで生まれ、新疆の学校ではこの老人の話
が副読本として使われ、ウイグルでは有名な人である。近年、ホータンの中心地に毛
沢東と握手している大きな像が建てられた。民族団結の象徴として今でも使われてい
る。ウイグル人にこの話を聞こうとするとうんざりしたような顔をされる。)



対照的に、イデオロギーと政治コースの中国の宗教のセクションは主な中国の宗教
を述べている。全体の 15 ページを占めるが、ウイグル人を含む中国の少数民族の宗教
の記述はない。

中国には、ある宗教の信徒が、すべて同じ少数民族である場合が多い。民族性と宗
教は異なった概念であるが、宗教は我が国で広く、深く、何らかの少数民族と結びつ
く。ある少数民族では、宗教思考といくつかの儀式が、彼らの社会生活のあらゆる局
面に浸み込んでいて、民族の習慣になっている。また、少数民族の宗教を尊重するの
は、少数民族の習慣を尊重することを意味する。したがって、信教の自由に関する政
策の実現は、少数民族の信仰への尊敬を意味する。

このように著者はカリキュラム、特に教科書を分析して、少数民族（ウイグル人）に対して配慮が欠けていることを指摘する。だが、中国の教科書はもともと全国一律の国定教科書であり、ウイグルで以前から使われている教科書も、ウイグル語で書かれてあっても、中国語からの翻訳にすぎない。この新疆班の学校でも特別に作成した教科書ではないようである。

社会資本としての新疆班

著者は「社会資本」をキーワードに新疆班がうまく機能しているかどうかを分析する。この概念の最近の理論上の発展は「グループ内社会資本」から「グループ間社会資本」を区別することである。

ウイグルの生徒の社会資本は、新疆班の寄宿学校でのウイグルの文化的な規範(言語、食物、儀式、および習慣)である。それら社会資本は結合している。そのため、彼らは他の民族の生徒と教師への橋を架ける社会資本に不足している。



(ウルムチの実験中学、バイリンガル教育など先進的な教育が行われた)

他方からみれば、ウイグルの生徒の社会的な資本増強が、中央政府的な学校文化への一種の文化的な抵抗になっている。食器を変えることに抵抗する、などの否定的社会資本に関するケースと、ウイグルの生徒が頭髪を坊主頭にするのは、食物と習慣に伴うウイグル文化に関するものである。

組織的統合は支配集団の力の正統性に関わる。文化的統合は民族集団間での文化的な適合か不適合に関わる。「中華民族多元的一体化論」などの多元論は異民族の文化的な特殊性を述べ、他方、「統一」はすべての中国の民族の社会構造の統合について言及する。

事実上、新疆班における、組織的統合の承認はウイグル民族のための選択である。ウイグルの生徒と新疆のウイグルの家族の両方が新疆班に関心がある。だが、ウイグルの生徒の社会資本は民族統合の文化面への抵抗を示している。社会資本のこの姿は、生徒が民族の文化境界を確立して、民族のグループの団結を高めるのに役に立つ。

生徒は理解しがたい面もあり、自己確立のため、敏感な民族の文化的な顕現を通して、時折、学校文化に挑戦する。特に宗教的なニュアンスがある振舞いをする。食堂で現地の漢人の生徒に抵抗する。コーラン、スカーフなども使われる。政府の政策は民族の統合を高めることを意図するが、実際の学校では、ウイグルの生徒と現地の多数派の漢人の生徒との相互作用を妨げている。



(カシュガルの民族小学校)

新疆班へのホータンの学校の対応の事例：

ホータンの隣にあるロブ県のこの学校は1990年に開校している。受験で有名である。1800人の生徒が在籍している、内地新疆高中班に38人受験し、20人（幹部2人、農民18

人)の生徒が北京、上海の学校に行った。内地新疆高中班が始まって、5年になった。少数民族地域を対象に、1500人を選抜し、主に貧しい農民を対象に、内地の都会で無料で勉強する。3~5万円の授業料を無料にし、農民が優先される。1年間は中国語の習得、あとは漢人と一緒に勉強する。全国で12箇所の大学の付属高校に行く。これにどれだけいくかで中学のランクがきまる。今年、ロプ県で40人が21の学校から行った。来年は本校から30人の合格の予定。2000年は1人も行かなかった。試験の事情がわからなかったからである。今まで58人行った。進学する大学はトップ10の大学、北京大学などである。いまではホータン地区の模範学校になった。(12)

この事例を見てもわかるようにウイグル人の大半はこの新疆班の制度にとりあえず賛成している。この新疆班の選抜試験に多くの生徒が殺到している。建前の農民優先は実現されていない。試験で選抜するとなれば、知識人の子弟が有利である。この制度の目的は民族団結であるが、ウイグル人はそれをそのまま受け取ってはいない。地位上昇の手段と考えているだけである。新疆班に先行して始められたチベット班でも同じことであろう。



(街角の古本屋)

複数のアイデンティティ

民族的と文化的な両義性を、より明確に記述しているのは、アイデンティティ・ポリティックスと混成に関するスチュアート・ホールである。

イギリスにおけるアフリカ系カリブ人のアイデンティティについて、ホールはアイデンティティのシフトに注目する。それは、多数派と制度による民族的もしくは人種的な分類のシステムに対応して、構成される。(13)

彼はアイデンティティ形成、または社会的な位置決めをめぐるディスコースの弁証的な状態について論じる。それによれば、過去のアイデンティティより、むしろ一連のカウンターアイデンティティが生まれる。黒人はかれらが黒人と見られるから、黒人と思うのである。ホールにとっては、移民の世界の異なる文化的な力の雑種混交が、新世紀を創生しなければならない。そこでは、人々がどんな純粋な起源も持っていないという事実を受け入れる。20世紀の末期では、イギリスの黒人のアイデンティティは、二重か複数の意識を持つ。そこでは一つのアイデンティティが他のものに対して状況的に使われる。黒人は、ますますアイデンティティの多様性を理解している。

アイデンティティという概念は西欧近代特有の人間主体についての考え方に由来している。西欧の近代形而上学では、人間主体は理念や法、制度、規則のなかで一定の規則をもつ存在として定式化されてきた。近代的な主体はそうした規範へと同一化する強いドライブに支えられてきた。

しかし、近代以後はそのような硬直したアイデンティティ概念は疑問視されている。前に述べたホールのように、アイデンティティの純粋性は否定され、マイノリティのアイデンティティはマジョリティや制度が課すものであり、そのように見られるから、ウイグルはウイグルなのである。状況によって変化する。その意味で安定性を欠き、多様性を示す。

さらに指摘しておくことは、すべてのアイデンティティは何らかの本質的で統合された性質ではありえず、言説の権力作用でのなかで偶然的に接合されて構築される。

新疆班のように不十分とはいえ教育投資を行ってはいるが、それが政府の意図するよう、国家統一の効果を上げているとはどうも思えない。ウイグル人にしてもチベット人にしても、そのような漢語教育体制に進んで参加するが、それは進学や就職に実利的に役に立つからなのであって、自らの民族的アイデンティティを失うことはない。ただ、教育言語が小学校から漢語だけになってしまうと、ウイグル語は文学的な言語として残るだけということはある。それでもウイグル人が中国人になってし

まうことはない。回人が中国語を話しても、回人であり続けているように。



スミスは民考漢の将来について次のように言う。「民考漢のアイデンティティは否定的なものから肯定的なものへ変えられる可能性がある。純粋性のないアイデンティティをたたえ、積極的なハイブリッド意識の発達を奨励する考えが将来、必要になるかもしれない。民考漢のような存在が、ウイグルと漢人をつなぐ、仲介者、架け橋となるかもしれない。1997年以降、ゆっくりと向上した民族間関係が(少なくとも都市の若者の)それを強く支持している国策と人々の全体の意思によって支えられるなら、新疆には、そのようなビジョンが可能であるかもしれない。」(14)

スチュアート・ホールを引用しながら、「純粋性のないアイデンティティ」や、ハイブリッド意識などを終わりに出して、民考漢の将来性を楽観視するとは論旨が一貫してないようにも見える。民族関係は2008年の北京オリンピックにおけるチベットとウイグルにおける民族対立の激化をみても、悪化している。市場経済の進行による経済成長と民族間関係は反比例している。資本主義的な競争原理が働き、元々、多様な意味での資本力に欠けるウイグル民族はますます、漢民族に差をつけられている。社会主義時代の平等原理が失われ、マイノリティは弱者になりつつある。

あらゆる少数民族地域で漢語教育は進むであろう。すでに満州人や多くの内モンゴル人が自らの言葉を忘れ、漢語を話している。自らの民族語を維持しているウイグル人とチベット人は民族団結の障害なのである。経済的効率をめざす資本主義的な観点からも双語教育は金がかかる。ウイグルでも多くの人々が民考漢にならざるを得ない状況が生まれてくる。言語は単なる手段とも考えられる。また、単純なウイグル人対中国人という民族的対立を考えることも問題である。それは政治的に操作されやすい。

文化的アイデンティティとは「あるもの」というだけではなく「なるもの」なのである。それは過去同様未来にも属している。(15) このようなスチュアート・ホールの言葉は、個々のウイグル人に未来についての選択を迫っている。

[注]

- (1)、J.J.Rudelson, *Oasis Identities*, Columbia University Press, 1997, p.128.
- (2)、渡辺公三、司法的同一性の誕生、言叢社、2003、6—8頁。
- (3)、Joanne Smith Finley, 'Ethnic Anomaly' or Modern Uyghur Survivor?—A Case Study of the Minkaohan Hybrid Identity in Xinjiang、in, Ildiko Beller-Hann et al.(eds) ,*Situating the Uyghurs Between China and Central Asia*, Ashgate Pub Co., 2007, pp.220-223.
- (4)、坂元一光、シェリンアイ・マソティ、中国少数民族の言語と集団間関係の新局面——新疆ウルムチの「民考漢」を中心に——九州大学大学院教育学研究紀要、2006、第9号(通算第52号)、82頁。
- (5)、同右、82頁。
- (6)、同右、80頁。
- (7)、Joanne Smith Finley、pp. 228—230.
- (8)、同右、p. 234.
- (9)、Yangbin Chen、*Muslim Uyghur Students In A Chinese Boarding School: Social Recapitalization As a Response to Ethnic Integration*, Lexington Books、2008、pp. 40—45
- (10)、同右、pp. 38—39.
- (11)、同右、pp. 31—32.
- (12)、2005年ホータンでの調査資料。
- (13)、Joanne Smith Finley、p. 227.
- (14)、同右、p. 236.
- (15)、スチュアート・ホール、小笠原博毅訳、文化的アイデンティティとディアスポラ、1998、現代思想、第26巻第4号、98頁。